

シンポジウム閉會の御挨拶

たけむらまきを
竹村牧男

(平成三十年十一月十一日)

本日、多數御來賓の御來駕を仰ぎ、身に餘る光榮、御禮の言葉もなし。日和も爽快なる小春に恵まれ、無事今年度の文語の苑の大會を締め括るを得たり。關係各位の御盡力のほど、改めて謝意を表するのみ。

今年のテーマはすなはち「日記」。種々の話題の提供せられ、甚だ充實したる講演會とこそはなりたりけれ。爰許こゝもとまた、日記に縁縁なきにしもあらず。二三日に一度、あるいは週に一度ばかりなれど、特筆すべき儀のあらんにはこれを記録に留め、時に應じては、喜怒哀樂を心に浮かびたるがままに文字にして鬱憤を晴らすの段少なからず。従前は口語を用ゐつれども、愛甲先生より御忠告を賜はるあり、自今は次第に文語に移行せんと期する所あり。

東洋大學を設立せるは井上圓了なり。明治の御代に三度外遊し、常に日記を記す。中に「歐米各國政教日記」あり。自らの「懷中日記」より抜粋して、世界の宗教、社會について整理したる所なれば、必ずしも日記形式といふを得ざるものあり。

國內の記述に目を轉ずれば、全國を巡回して講演をしたる日記もあり。「南船北馬集」と銘打ちて、日記形式の克明なる記録を残し、優れたる紀行文と讃ふるを得るの傑作なり。さは、明治三十九年より大正八年に到る日記にて、全十六篇より成る。この間、圓了の行ひたる講演回数、豈吃驚あにきつきやうせざるべけんや、前後五千回に達す。

「南船北馬集」の一節を紹介仕らん。第一篇、冒頭に近き所、「大和紀行」と題する明治三十九年四月に

始まる日記なり。

十五日（日曜） 晴れ。小西氏の樓上に宿するに、

終夜流水の聲あるを聴き、同氏の名は音石なるにちなみて、言文一致流の俗調をつづる。すなはち「夜もすがら、石間をきしる水の音、聴けば心も清くなりぬる」の狂歌なり。ときに芳野山の櫻花は満開なりといふを聞き、小西氏および上田氏とともに川を渡り、溪行里許にしていはゆる下千本の山下に至る。途上、一吟あり。

春山青一色、中有白雲横、

近見花千疊、團々都是桜。

【春山青一色にして、中に白雲の横に靡く有り。近づくほどに花の千に疊なるを見る。團團たる、都て是櫻なり。】

茶亭に一憩して歸る。觀客疎々、車行遅々、その

幽邃の状態は墨堤、嵐山と同日に論ずべからず。かつ余の所感は「芳山有花而無水、上市有水而無花、人間萬事皆如此、兩者難兼君勿嗟」にて、芳山に水なきは觀客のみな遺憾とするなり。

【芳山、花有れども水無く、上市、水有れども花無し。人間萬事皆此の如く、兩者兼ね難ければ君嗟くこと勿れ】

午後、上市を去り龍門村（現在奈良縣吉野郡吉野町・宇陀郡大宇陀町）に入る。途上の所見、左のごとし。

樹は黒く麥は緑りに葉は黄なり、桃紅李白、春の山里。

宿坊は西蓮寺にして、位職は西岡順察氏なり。庭前に老松の臥龍に似たるあり。

窓外老松在、如龍又似仙、
臥雲三十丈、吸氣一千年。

【窗外に老松在り。龍の如く、また仙に似る。

臥雲がうん三十丈、氣を吸ふこと一千年】

村内に龍門瀧と名付くる小瀧布あり。行きてこれ
をみる。

此の如く、隨所に箴せいはむるに即興の漢詩和歌を以て
し、さは悉くは佳作といふを得ざらめど、資料的價
値は棄て難きものあり。加之しかのみならず、風流の味はひ深き
こと、古今の名作にをさをさ屈することなかるべし。

今年は、圓了生誕百六十年、而して百回忌なりき。
さすれば來年は百周忌、なほ一層圓了を想起するの
辰とせに非ずや。これが師には哲學あり、はたまた佛教
を基盤とせる深淵なる思想、卓越比類なき教育理念
あり。以て八洲に喧傳し、その足跡を顯彰するは我
らが責とする所にあらずや。

三

東洋大學にては、毎年、文語の苑の大會開催に些
かなりと微力を捧ぐるあり。然りといへども、文語
の普及は遅々として成り難く、貢獻つかまつ仕りて其甲斐
ありたりとは言ふに憚りあり。今回、本學若き教員
の御參加下されたるを契機として、文語愛好サーク
ルの設立等を念頭に置き、一層盡心竭力じんしんげつりき、庶幾こひねがはくは、
蠅螂たうちうの斧ならんとも、本朝文化の伝統を維持するに
一助と成らんことを。

本學は文語の苑の御趣意に深く感ずる所あり、今
後とも御活動に寄與するを得れば此の上なき幸甚な
り。宜しく願ひ上げ奉る。

文語の苑先生各位、民族の夢追ひて御身を獻する
の至誠を拜し、争やばか感ずる所なくて己むべしや。御
健勝御活躍を祈念し、以て閉會の挨拶と爲す所なり。
謝辭、意を盡さざるを恨むるのみ。

三